

がん哲学外来

樋野興夫 順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授

家族に見捨てられ、
大腸がんを患った

還暦を迎え、来年には定年を迎えようとしています。仕事を離れた後は、それまで苦勞をかけ続けた妻と2人で、のんびりと趣味を楽しみながら悠々自適の日々を楽しみたいとささやかなハッピーリタイアメントを夢見ていました。ところが数カ月前から事情が一変、私の願いは破綻をきたしています。

長年、連れ添った妻からある日突然、「もう、貴方との暮らしに耐えられない」と離婚話を持ち出されたのです。その後、妻は実家に帰り、今は弁護士を通じて慰謝料を請求しています。じっさい、私は良き夫には程遠い存在で、毎晩のように泥酔し、気に入らないことがあると、妻に怒鳴り散らし、ひどいときには手を上げることもありました。そんな私の姿を見ているからでしょう。すでに独立している2人の娘にそのことを話しても、「お父さんの自業自得よ」と、冷たく突き放される始末です。

そして、そんなある日、追い打ちをかけるように、会社の健診でステージⅢの大腸がんが発見されました。

まさに踏んだりけったりの状態。つらい手術は無事に終わったけれど、これからはたった1人で、わびしい暮らしを続けながら、病気と闘っていかなければなりません。私としては何とか妻に戻ってきてもらい、娘たちとも和解して、心穏やかな暮らしを送りたい。でも、現実を見ると、そんな願いはとて叶えられそうにありません。これから何を心の支えに生きていけばいいのでしょうか。

(神奈川県、K・Tさん、60歳男性、会社員)

独善的な日本人男性

私が主宰するがん哲学外来にもK・Tさんと同じように、生きる希望を失くして私を訪ねて来られる方が少なくありません。

日本人男性、とくに今の中高年には自己中心的で、家族や家庭を顧みることなく、^{ほうらつ}放埒な人生を送ってきた人が少なくありません。少々、酷なものいかもしれませんが、そうした身勝手な生き方を続けてきた報いが、今になって現われているわけです。

彼らに共通しているのは自負の強さと、その反映でもある自分自身の甘えです。わかりやすくいうと、自分は懸命に働いて、家族を養い家庭を支えている、だから何をしても許されると考えているのです。

おそらくK・Tさんが夢見ていたハッピーリタイアメントというのも、結局は1人よがりの独善で、結局は自分の希望を奥さんに無理やりに押し

つけるようなものだったのではないのでしょうか。

そうした自分や家族に対する甘えが強ければ強いほど、それが破綻した後に訪れる落胆も手痛いものになる。K・Tさんが今、味わっている虚しさは、そのまま、それまでのK・Tさんの身勝手さの裏返しといえるでしょう。

では、その苦境を脱するにはどうすればいいのでしょうか。

本当の意味での絶望は 存在しない

キリスト教の教えに「神はその人に耐えられない試練は与えない」という言葉があります。それは言葉を替えると、本当の意味での絶望は存在しないということでもあります。

逆にいうと、人間はとことんまで落ち込むと、それまでとは異なる^{しょうこう}曙光を

● がん哲学外来

見出すことができるということです。井戸の底深くまで落ち込むと、人間は誰でも開き直って姿勢を反転します。その結果、それまでは見えなかったものも見えるようになるわけです。

もっともK・Tさんの場合は、まだその境地には達していないようにも思えます。そのことは奥さんに戻ってもらい、娘と和解したいという言葉に表れています。

本当に落ち込んで自らを悔いているのであれば、家族のことも「自分が悪かったのだから」と、あきらめているはずです。つまりK・Tさんには、まだ甘えが残っているということです。

K・Tさんが新たな人生を拓いていくためには、まず、その甘えを切り捨て去る必要があるでしょう。過ぎたことにぐずぐずと執着しては、いつまでたっても事態は変わりません。

もっともそうした心境の変化は、意

識的にコントロールできるものではありません。その点で考えると、K・Tさんにはもうしばらくつらい状態が続くかもしれません。

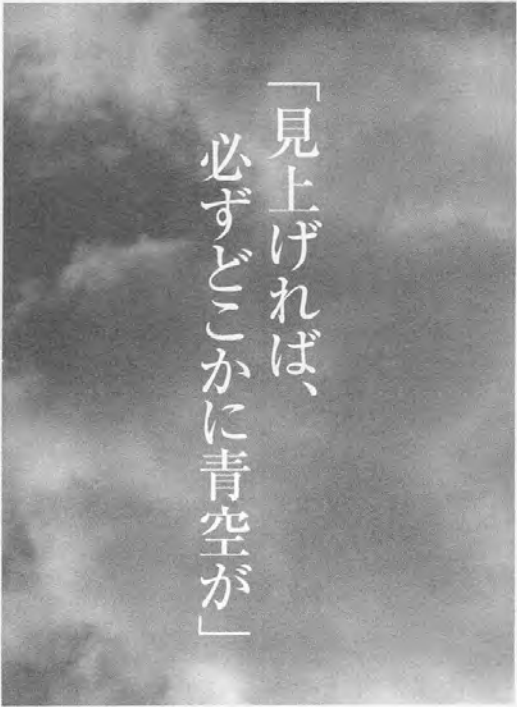
そうして絶望がピークに達したときに反転のときが訪れる。そのときに、それまで自らがためしたことに対する代価をきちっと支払って、スッキリとした状態で新たな出発点を迎えられるのです。

青空はいつも頭上に 広がっている

さて、新たな出発点というと、その人を巡る環境に変化が訪れると思われるかもしれませんが、しかし、じっさいには目に見える形で何かが起こるわけではありません。変わるのはあくまでもその人の内面です。

抽象的な表現になりますが、青空はいつも変わることなく、すべての人の頭上に広がっています。

今月の言葉



「見上げれば、
必ずどこかに青空が」

しかし、絶望という名の井戸に落ち込むと、暗い壁に遮られ、空が見えなくなってしまう。もっとも井戸の底まで達して姿勢を変えると、視点が変わり、わずかな隙間からきれいな青空が見えるようになるのです。そうなれば、その青空に向けて少しずつでも這い上がっていけばいい。

では、その出発点からどのように歩を進めればいいのか。

具体的な行動としては、心の翼を広げて多くの人に接していくことです。がん患者会などに足を運んで、直接的に他の人との関係を広げるのもいいし、書物に親しんで先人の生き方、考え方を学ぶのもいい。

そうして自分の世界を広げていけば、それまでとは異なる新たな生き方が自然に見つけられることでしょう。そして、そこには必ず、自分を待ち受けている人がいるはずで。

そんなふうに一歩一歩、着実に自分

の道を踏み固めていく。その過程で頭上の青空はさらに広がりを増していくことでしょう。

そんなK・Tさんを目の当たりにすれば、ひょっとすると、見切りをつけられた奥さんや娘さんの対応も変わってくるかもしれません。そのためにも、まずは甘えをきれいに捨て去ることから始めるべきでしょう。 ㊟

ひの おきお 1954年島根県生まれ。順天堂大医学部病理学教授、医学博士。(財)癌研究会癌研究所病理部、米国アインシュタイン医科大学肝臓研究センター、米国フォクスチェースがんセンター、(財)癌研究会癌研究所実験病理部部長を経て現職。2008年より「がん哲学外来」を開設し、全国に「がん哲学カフェ」を広めている。近著に「見上げれば、必ずどこかに青空が」(ビジネス社)